

にほしま

第 25 号

Feb. / 2021

令和 3 年 2 月



ハワイ移民資料館
仁保島村

〒734-0026 広島市南区仁保三丁目 17-6
NIHOJIMAMURA TEL&FAX 082-286-6331

ホームページ

<https://hawaiiniho.com>

kawasaki1885@yahoo.co.jp



移民の風景

広島県

佐伯郡

廿日市市 宮内・地御前・串戸市民センター 3 館共催事業
講演「知られざるハワイ移民史」配布資料

勸内第一二一四號

戸長

布哇國出稼移住方ノ義ニ付襲ニ及示談候趣モ有之
處右ハ差當リ一千三百人ヲ要シ年齢四十歳未満ノ農
夫ニシテ砂糖製造若クハ他ノ耕作労働ニ堪ヘ候者ヲ
選ヒ八百名程先ツ第一著手ニ明十一月廿日横濱港ヨ
リ渡航爲致候趣且ツ其出稼人ハ妻子携帶ノ者ニテモ
不苦各其本籍ノ地ヨリ同港迄ノ旅費ハ自辦ナレト別
ニ前金借用ノ定メモ有之又同港ヨリ該國ホノル、府
迄ノ渡航費用ハ一切該國政府ヨリ支辨シ着ノ上ハ相
當ノ宿處食料等ヲ付與シ其外ニ本人ヘ一ヶ月九弗其
妻ヘ同六弗宛ノ給料ヲ拂渡シ三ヶ年間農夫ノ業ニ就
カシノ候義ニ有之候條部内ヘ懇諭ノト移住人員年齢
等取調來ル九日限り可申出尚巨細ノ義ハ志願人於テ
當廳ヘ出頭ノ上相尋子候様可取計此旨相達候事
但本文期日マテニ何等申出サル村方ハ右ニ關係始
之卜可見做候事

明治十七年十二月三日

佐伯郡長 山口光風

廿日市市教育委員会蔵

夢のような雇傭条件。地方官諮問会で「ハワイ国移住民募集」を知らされた広島県令千田貞暁は、
県民の生活建て直すと、逼迫した県財政を好転させる絶好の機会と捉えた。県内市郡長に公布を指示
したが、締切までに残された日数はわずか 1 週間。

1885(明治 18)年 1 月 27 日、廿日市町 32 人・平良村 20 人・原村 15 人、計 67 人が見知らぬ国、
ハワイ国へと、横浜から旅立った。



ハワイ移民と農業年雇・職人の年間収入 (円)
レート100円につき87ドル

財政と経済の悪化

財政の健全化の前に立ちほだかったのは、国家歳入の31.8%を占めた家禄・賞典禄・社寺禄の存在であった。政府は確かな歳入として、炭鉱・製糸・紡績・各種鉱山・造船などの官営事業を起こしたが、残されたのは過大な投資の負債の山であった。

1876(明治9)年国立銀行条例が改正され、全国に153の国立銀行が誕生した。地方経済の活性化に寄与した反面、資本金の80%まで紙幣の発行を許可されたため、発行高は巨額となり紙幣価値が下落した。

1877(明治10)年西南の役では、国家予算の81%という莫大な戦費を投入、そのため大量の不換紙幣を発行。ここに来て一段と紙幣価値は下落し、激しいインフレーションが起きた。

1881(明治14)年、大蔵卿に就任した松方正義は「官営事業の払い下げ・中央政府支出分一部を地方税に転嫁・不換紙幣の整理と紙幣発行種の統一・日本銀行の創設・醤油、菓子税の新設・酒造税、たばこ税の増税」など次々と財政の再建策を打ち出した。

その結果、紙幣価値は安定したが急激な物価下落が起きデフレーションとなり深刻な不況に陥った。

翻って、1873(明治6)年政府は歳入の安定化のため、農民による納税制度を改革、地租改正に着手した。

「地積を測量、地目を定め地目別に地価を算出、地価の3%を地租」として「物納から現金納付にする」というものであった。

農民は作物の豊凶や市場価格の変動にも拘わらず、一律課税された。

インフレーションからデフレーションと大きく上下する二つの嵐は農民を翻弄。加えて、特産品の綿花・綿製品の不振と米価の暴落、その上、田地価格の下落という三重苦が農民たちを苦しめた。

江戸時代の歳入額を前提にした地租納付を迫られて、この時代、最大の被害者は農民たちであった。

早くから農村不況を心配した広島県は、北海道移住にその活路を求めた。

農民一人あたりの農地1反37歩、全国平均2反2畝40歩の半分以下である安芸国は零細な農民が多かった。

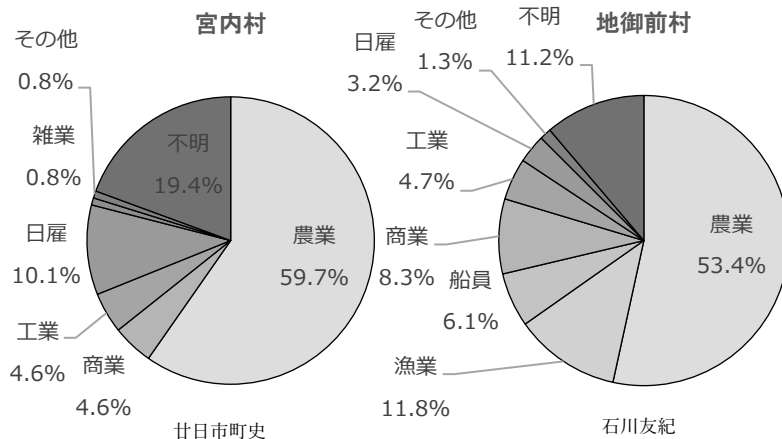
でっかい農地で思う存分百姓が出来る。ハワイ移民が始まる前の3年間、広島県からの移住者は全国上位を占めた。

1890(明治23)年から再び増加に転じた。注目すべきである。

廿日市町役場「宮内村雑書綴」に北海道転籍移住民10人が戸長あてに提出した1885(明治18)年1月付の誓約書がある。「移住民全員が共助し、官の保護を受けるようなことは致さず」視点を変えれば、送り出す行政が移住する村民の新天地での生活を思いはかっていることの証しと言える。

ハワイ移民と併せて、北海道移住にも思いを巡らせたい。

官約移民の職業別割合



北海道移住

年次	戸数	人数
1882(明治 15)	70	330
1883(明治 16)	107	492
1884(明治 17)	159	635
1885(明治 18)	98	455
1886(明治 19)	75	360
1887(明治 20)	21	81
1888(明治 21)	17	83
1889(明治 22)	14	52
1890(明治 23)	43	125
1891(明治 24)	82	181
1892(明治 25)	213	810
1893(明治 26)	363	1349
1894(明治 27)	359	1374
1895(明治 28)	262	878
1896(明治 29)	258	901
1897(明治 30)	261	704

※木挽(こびき) 伐り出した木を材木に挽く職業の人

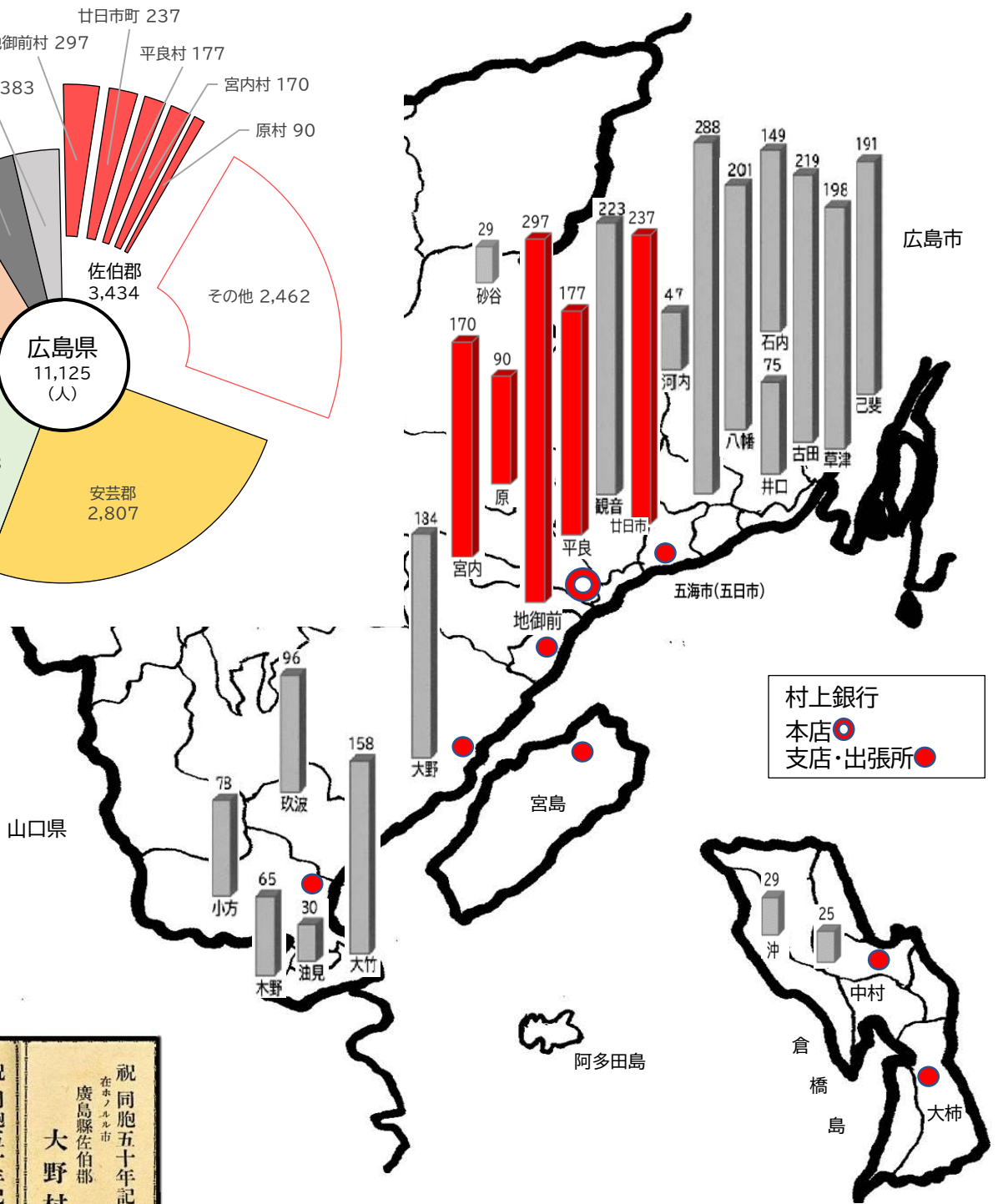
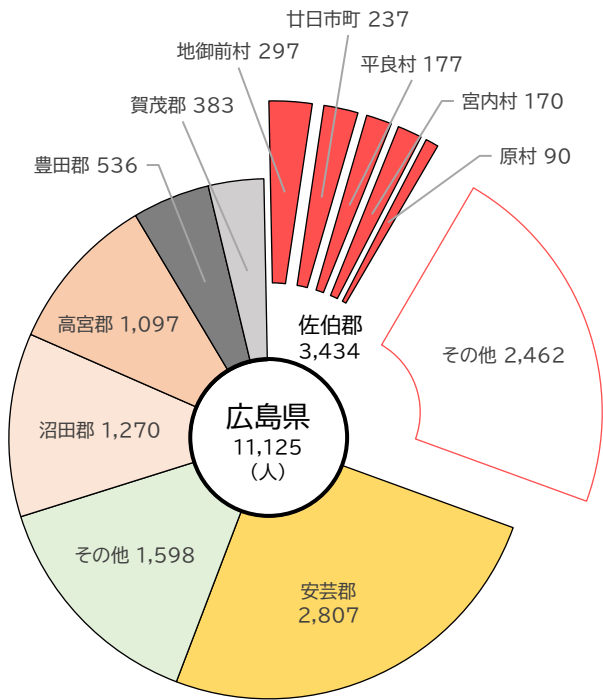
※杣(そま) 立木を伐り倒す職業の人

※農業年雇 農家に雇用されている同居人で年間150日以上従事している人

※国立銀行条例 国営の銀行ではなく、国が定めたこの条例に基づいて設立された銀行

移民送出の分布図

1885(明治18)年—1894(明治27)年



祝 同胞五十年記念
在ホノルル市
広島縣佐伯郡
大野村人會

祝 同胞五十年記念
在ホノルル市
広島縣佐伯郡
小方村人會

官約移民50年記念誌 日布時事 1935(昭和10)年刊

祝 同胞五十年記念
在ホノルル市
広島縣佐伯郡
八幡村人會

祝 同胞五十年記念
在ホノルル市
広島縣佐伯郡
地御前村人會

祝 同胞五十年記念
在ホノルル市
広島縣佐伯郡
廿日市町人會

祝 同胞五十年記念
在ホノルル市
広島縣佐伯郡
石内村人會

祝 同胞五十年記念
在ホノルル市
広島縣佐伯郡
大竹地方人會

祝 同胞五十年記念
在ホノルル市
広島縣佐伯郡
木野村人會



1885(明治 18)年 31 歳で戸長、1888(明治 21)年に助役に推された卯之助は、村内出身の移民たちから続々と送られてくる多数の送金を目の当たりにし、アメリカとハワイには、大きな可能性を秘めている社会があると強く引き付けられた。

おりしも、カリフォルニア州立大学で美術を学んでいた伯父の小林花吉(千古)と手紙のやり取りをする内に、「アメリカには夢と理想がある」と確信、1890(明治 23)年 8 月花吉を頼りに単身渡米した。

州内を旅して商業・風俗・人情をつぶさに観察。当時在住の日本人は少なく、彼の行動は先々で注目を浴びた。その後、日本人経営のぶどう園で 4 カ月間労働を体験。翌年ハワイに新天地を求めて転航した。

ハワイでは、カウアイ・マウイ・ハワイ島を周り、実業家として生きることを決心。ホノルルを活動拠点と定めた。商社である南有社に職を得ると店員 2 人を同行させて出張販売の島巡りに出発。日本人労働者を相手の商売は目論見が的中、多額の利益を得たが、同行の 2 人が酒と博打に費消。この時、卯之助は極度の人間不信に陥った。

気落ちした彼に幸運が舞い込んだ。旅館開業の話であった。話しはトントン拍子で進み、1892(明治 25)年 スミス街で開業することになった。屋号はハワイ屋。2 年後には雑貨店を併設、商売は上昇気流に乗った。

労働期間を終えた帰国者は、必ずホノルルに宿泊。加えて各島からの来府者の需要があり、旅館業は間違いなく将来の有望株であった。その後、私約移民の時代を迎えると、ホノルルを基地として往来する移民達が急増し、資本蓄積の機会となった。この頃から旅館は、乗船手配・総領事館・ハワイ官公庁への諸届など手続きに不馴れな移民たちのためにその代行をするようになった。

ところが、順風満帆であった旅館事業に災難が襲った。1899(明治 32)年 12 月 2 日ペスト患者が発生。ハワイ衛生局は予防・絶滅対策に万全の体制を敷いたが広がる一方、最後の手段である家屋の焼払いを決断した。ところが折からの強風にあおられてマウナケア・スミス・ベレタニア街を全焼、日本人 3589 人・支那人(当時の呼称)・ハワイ人 3100 人が被災した。

スミス街の小林旅館・雑貨店も焼失、その被害額は約 4 万円という莫大な金額になったが、再起の決断と行動は素早く、パラマ街に旅館を新築し見事に立ち直った。

旅館経営は弟金次郎に任せようと 1901(明治 34)年 地御前から呼び寄せる。1902(明治 35)年 11 月、一時帰国。卯之助は故郷の社会資本が脆弱なこと、旧態たる政治風土を痛感、「故郷の発展に残りの人生を捧げる」という固い決意を持った。金次郎の旅館経営の能力と社会奉仕に参加する姿を見届けた卯之助は、在布 16 年ハワイに別れを告げ次なる理想を求め、地御前へと向かった。1908(明治 41)年帰国。

意欲的で革新的な発想と行動力は人々に支持され、地御前村会議員、佐伯郡議会議員 1 期、村役場助役を経て 1913(大正 2)年から 4 年間村長の職を勤め故郷の発展に尽くした。

在布中には、ホノルル旅館組合長、日本人慈善会、帝国軍人後援会、ホノルル本派本願寺など各役員を歴任。実業界では、日本人銀行・布哇製麺の取締役として経営に携わった。

来府・・・ホノルルに来ること

在布・・・ハワイに滞在、居住すること

帰布・・・ハワイに帰ること

館 旅

スミス町 郵函八七四
小林商塵

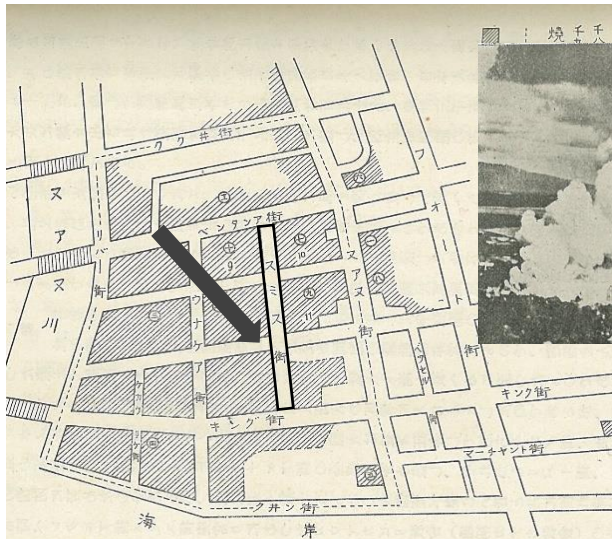
資料①

布哇屋
小林卯之助
 旅館並汽船乗客荷物取扱所

食料品雑貨
特別安賣

弊店事数年來營業致居候處遠次繁榮ニ赴キ難有奉鳴謝候就テハ平素の御眷顧ニ酬ヒン爲メ今一層ノ大勉強ヲ以テ町噂ニ取扱ヒ仕候ニ付倍舊御引立ノ程偏ニ希ひます

小林旅館 被災



ホノルル・ペスト焼き払い事件

被災した地域には、日本人経営の旅館 10 ・商店倉庫 29 ・時計金物裁縫店 24 料理店 9 ・集合住宅 9 ・工場など文字通りのジャパニーズ・タウンであった。

日本人社会は日本国総領事・横浜正金支店長ら実力者がリーダーとなり臨時日本人会を組織し、日本人慈善会・日本婦人会・日本人医会と連携を深め被災者の生活再建に乗り出した。

ところが、ハワイ政府は「被害額は政府が算定したものを標準として交渉には応じるが、訴訟は出来ない」と発表。

反発した日本人会は合同してハワイ議会で提訴、勝訴した。賠償金全ての支払いが終わったのは事件から 3 年 8 カ月後の 1903(明治 36)年 7 月 25 日であった。

小林旅館

小林旅館はアラ公園の北側道路を隔てた南向き、オアフ鉄道のホノルル・ステーションへは歩いて数分の距離、日本行棧橋も車で5~6分という立地条件は絶好の位置にあった。

数ある旅館の中で、集客力・資金力があり日本国総領事館・ハワイ官公庁・プランテーション経営者・各種の日本人会に顔が広く、川崎・山城屋・米屋と共にホノルル・ピック4といわれた。

営利を求めただけでなく、「オアフ島第1次ストライキ・5教師上陸拒否事件・日本語学校裁判事件」などにも物心両面の支援を惜しまず日本人社会の発展に尽くした。

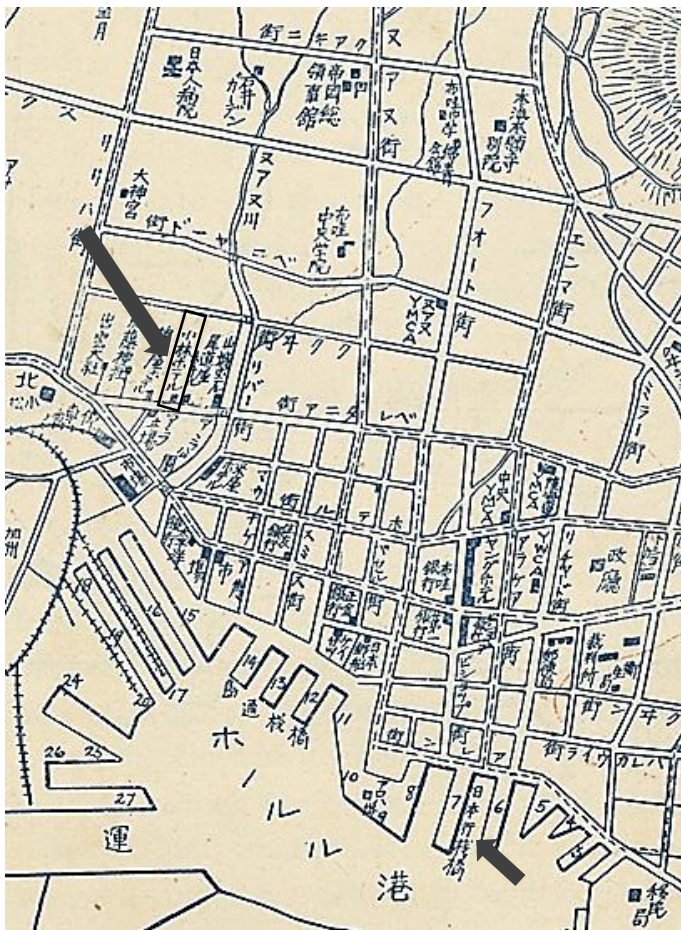


創業地スミス街からパラマ街へ、さらにベレタニア街へと移転を重ねた。弟金次郎に経営を委ねる。

旅館の経営者 ホノルル 1909(明治42)年

福岡	熊本	山口	広島
間宮七蔵	永田清 西村金太郎 高木源太郎 土山培雄	西村周助 佐藤好助 松田猪七 平野宗一	川崎喜代蔵 米屋三代榎 今村幾太郎 濱村京一 小出虎吉 山城松太郎 小林卯之助

移民は同県出身者が経営する旅館に宿泊する。そこでは同郷者の消息を知り、就職の世話も受ける事が出来た。そのため旅館数も出身県の移民数に比例した。



金次郎の妻セキが再渡航して経営に采配をふるう。



カナエ・コバヤシ帰布事業の拡大に専念。

証言 カナエ・コバヤシ



1924(大正13)年に父金次郎が死亡、母一人ではホテル業を続けていくことはむづかかったのでホテルをリースに出し、母子6人が地御前に里帰りしました。私は地御前小学校4年に編入して広島二中を卒業早稲田大学へ進学しましたが、1937(昭和12)年日中戦争が始まったことや、翌年には国家総動員法が出来てその内、アメリカとも戦争になるのではないかという気配と、ホテルの経営の必要から1938(昭和13)年急遽帰国しました。

1942(昭和17)年軍隊に志願、工務隊を経たのちホノルルの司令部付通訳として終戦まで軍務につきました。

現在は弟と共にコバヤシ・トラベラーズを経営しています。日系人連合協会元会長 1997(平成7)年11月 インタビュー

小林旅館の今

1980(昭和55)年旅館部門から「オアフ・ハワイ島バスツアー」を主軸とする観光ツアー事業に特化、卯之助が育てた事業は脈々と今に引き継がれている。

協力 高山善裕(国立国会図書館) 松木鶴美 新見忠昭 上土井健太 川路広美 吉田禎子 佐伯剛 広島県立図書館 毎日新聞大阪本社情報調査部 久観交通

参考文献 布哇日本人史:木原隆吉 広島銀行創業百年史 日布時事:布哇年鑑 廿日市町史 日本移民の地理学的研究:石川友紀 明治時代館:小学館 日本官僚制総合事典:東京大学出版会 広島市紳士名鑑:大野音次郎 広島県人物評伝:藤木霧溪 布哇成功者実伝 布哇日本人銘鑑 ふるさとの銀行物語:田辺良平

郷土の誇り 村上銀行

佐伯郡内でも指折りの地主であった村上隆太郎は、海外移民からの多額の送金に着目。1898(明治31)年4月郡内移民送金の最多を誇る地御前村に、個人立による村上銀行を創設した。当時郡内には佐伯貯蓄銀行と大竹貯蓄銀行が開設されていたが、貯蓄銀行は直接海外からの送金取り扱いが出来ず、送金の受け入れ銀行(コルレス契約)になれば預貯金の歩溜まりが多く見込まれ、そのまま貸金として運用出来、郡内の経済活性化につながると考えた。

村上個人に対する移民の信用が絶大で、開設から早くも2年後には五海市村(五日市町)、翌年には平良村(廿日市町)に支店・出張所を設けるまでになった。

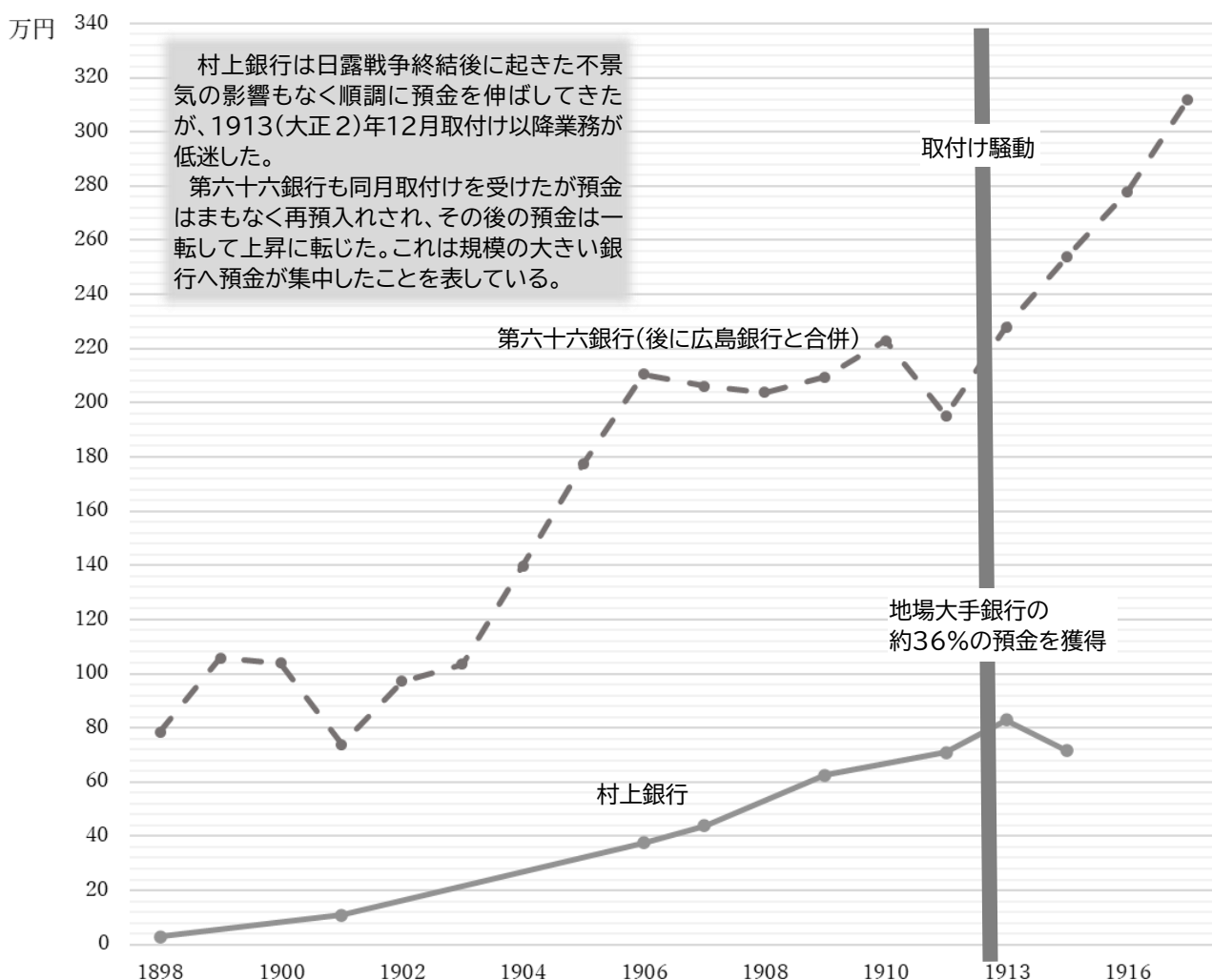
1907(明治40)年には法人化して、平良村下平良に本店を移転、佐伯郡内を中心に支店・出張所を7か所設置し店舗網を拡大した。

同行の預金・貸金残高は、日露戦争終結後の不景気の影響も全く受けず順調に推移したが、1913(大正2)年郡内で八田貯蓄銀行の取付け騒ぎが広島市内に波及したその余波と、翌年末、同行と取引きのあった山口の福松銀行の休業に端を発した流言が、同行の取付け騒ぎに発展した。

村上の信用と資金力で無事乗り越えられたが、『規模の小さい地方の銀行では激しい経済変動には対処出来ない。預金者への安全保護を最優先』という観点から1916(大正5)年広島銀行に債権債務と店舗一切を譲渡。翌年には営業権(名板)を熊本県人に売却して村上銀行を解散・清算結了した。

こうして移民の預金と債権者の債務(債権)は混乱なく、安全に譲渡され、村上自身も経済的打撃を受けず、また、名誉も傷つくことなく18年間の銀行家生活に幕を降ろした。

村上銀行と第六十六銀行(地場大手)との預金比較



※ コルレス契約 送金や外国為替を決済(代行)する銀行間契約。

※ 預貸率 預金に対する貸付金の比率。高すぎると運転資金に余裕がなく、低いと経営を圧迫する。

※ 1899(明治32)年3月、1900(明治33)年1月の銀行条例改正により銀行設立に歯止めをかけられるようになると、休業中の銀行の営業権利が売買されるようになった。

広島への取付け

1913(大正2)年12月8日、八田貯蓄銀行の横川・祇園の両支店に預金の引き出しを求めて預金者が殺到、同行は鉱山や干拓、不動産事業に預金額を越える多額の融資が中心であったため、資金の固定化により運転資金が不足、たちまち払い出しが困難となり、翌年2月28日まで臨時休業を発表した。
1913(大正2)年12月11日 中外商業

広島市の安芸貯蓄銀行では、貸付金が預金より上回り経営にも支障をきたしていたところに、「八田貯蓄銀行の支払い停止」が伝わり取り付け騒ぎが起こった。11日に整理休業を発表した。
1913(大正2)年12月12日 大阪毎日

前2行の余波を受けて広島実業銀行・広島商工は11日臨時休業を発表。広島貯蓄銀行は広島銀行の傘下であり支払いが継続出来た。日本銀行は広島銀行に50万円、広島商業銀行に30万円を緊急支援して鎮静化を計った。
1913(大正2)年12月14日 時事新報

移民の島 周防大島でも

周防銀行は、預金306万円(大島郡内150万円)・貸付金295万円を有し1割配当を続けるほどの優良銀行であったが、預貸率が高いため手許資金に余裕がなく1913(大正2)年末一時臨時休業に追い込まれた。
1914(大正3)年3月28日 中外商業

周防銀行の大島郡内の休業の余波は、大島銀行にも及び預金者が払い出しに殺到した。
1914(大正3)年3月31日 時事新報

二度目の取付け ハワイでも報道

▲村上銀行取附(廣嶋) 廣嶋縣佐伯郡二十日市町の村上銀行は十二月二十三日午前十時より突然取附に達し今尚騒動中なるが同行は資本金十七万圓積立金十萬二千圓にして同郡五日市町、大野村、能美嶋、大竹、地御前、小方、大木村、廣嶋町等の同郡内樞要の地に支店又は代理店を置き手廣く營業し居る爲め預金総額八十二餘萬圓貸出六十萬圓ありて小銀行としては比較的確實なる營業をなし居りたるを村上一族は相當の資産を有し居る爲め信用厚かりしが同地近在に於て村上銀行は戸を開けたりと噂するものありし由にて時恰も年末に際し居るより流言蜚語は夫れから夫れへと傳はり斯く大事に至りたるものなりと二十三日に約五萬圓を支拂ひ二十四日廣嶋より約十萬圓の資金を調達して持ち歸り支拂ひに應じ居りし下の銀

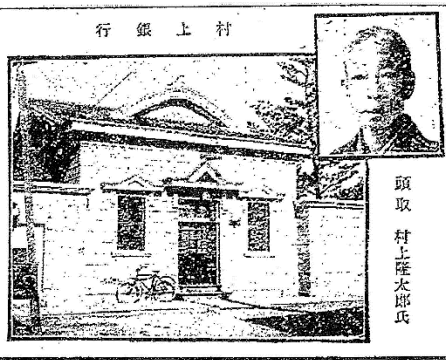
村上銀行は「資本金17万円・積立金10万2000円・預金総額82万円・貸付金60万円」を有する小規模銀行ではあるが、頭取村上隆太郎は相當の資産を保有し、経営も堅実で厚い信頼を得ていた。ところが、昨年12月23日午前10時から突然取付け騒動に巻き込まれ、同日は約5万円の預金引き出しに応じ、翌日には広島から約10万円を調達して預金者の不安に備えた。
日布時事 1915(大正4)年1月8日

第2報
さらに24万円を追加準備。窓口での取扱い時間も延長し、全ての払い戻し要求にも制限を設けず冷静な対応をしたことが人々に安心感を与え、26日には鎮静化して通常業務に戻った。結局、払い戻し総額は約6万円であった。
同 1月14日



村上銀行 新聞が特集

▲由來廣嶋縣は全國第一海外出稼地にし中にも佐伯郡は其優なるものなり。然して彼等多數の移民が年々其出稼地より



合名村上銀行
▲同行は如上海外出稼人の送金を取扱ふ特種の銀行なるより擴正金銀行の信用厚く殊に同行と契約して一般出稼人に對し便利を計るより本年六月末の預金高の如きは、八十八萬圓の巨額に上り。殊に同行が他の一般銀行と異なるは社員が皆一族を以てせるとなり。即ち頭取は前記村上隆太郎氏、副頭取は村上信太郎氏、社員は村上定一、村上勉吉、村上義一、村上博二、村上國吉氏等なり。



▲之れ村上銀行の前身にして又同郡移民金融機關の濫濫たり。爾來十有五年同行は敏速便利と親切を旨として専心出稼人の爲めに計る所ありしより非常なる信用を博し其後益々業務を擴張して明治四十四年四月組織を變更して合名會社と爲せり。

▲又組織を合名會社となすと同時に從來の地御前村は交通の便利悪きより本店を廿日市町に設置し益々業務の擴張に努力する結果現今には同郡出身の海外出稼人にして同銀行の存在を知らざるものなきは勿論餘下一般の出稼人間に信用を博し隆々として其聲名を揚げてあり。

▲本年六月末調査に據れば同行の預金は前記八十八萬圓にして貸出は七十四萬圓有價證券二十七萬圓、資本金並に積立金は二十五萬圓を有せり。

▲同行は頭取村上氏の専心行務を經營する外社員皆一族にて他人を交へざるより恰も一家の如く打ち揃うて活動し益々信用を博し隆々として、あるは處す可し。

